# Mrs. サッチャーのすべて

★この特別企画は
9月号、10月号、11月号の3回に
わたって特集されます。

# MARGARET THATCHER

## マーガレット・ヒルダ・サッチャーの素顔から何かが始まる

「鉄の女」サッチャー女史が
再び日本にやってくる
ロンドンのダウニング街を去った
サッチャーさんがやってくる
英国が生んだ初の女性宰相は
咲き誇る大輪のバラ
そのしたたかさ、強さ、確実さが
美しさをより際立たせていた
それは本物だけが持つ輝きだった
今、彼女の世界を見る日は
幾分の諦めと優しさを湛えながらも
ますます輝いてる
激動の世界を生き抜き
素顔に戻った今の言葉は重い
これからも何人もの「サッチャー」が
誕生する期待を込めて
素顔のサッチャーさんに会いたい
彼女を生んだ英国を知りたい

CONTENTS


**Part-1**
**"鉄の女"の知られざる素顔**

6
PERSONALITY
自らの努力で運をつかんだ人生哲学

8
LIFE STYLE
素顔は"家庭の大切さ"を語る政治家

10
FASHION
保守党の色・鮮やかなブルーがお気に入り

12
HOBBY
"鉄の女"の原点?唯一の趣味は政治!?

13
FAMILY
サッチャー女史の人生を決めた家庭環境

**Part-2**
**特別インタビュー「私の知っている素顔のサッチャー」**

16
レディ・パディ・リズデール
Lady Paddy Ridsdale
英日友好議員連盟会長夫人

18
ミセス・ジェーン・マーウィック
Mrs. Jane Marwick
フォルテ・ホテル・グループ・ジャパン
副社長

**Part-3**
**サッチャーと英国政治**

20
[コラム]
①英国の議会制度
②英国の選挙制度
③英国の政党
④英国首相の選ばれ方

# 自らの努力で運をつかんだ人生哲学

何事においても運、不運はつきものですが、運だけでは何も切り開けないのも事実です。サッチャー女史の場合も、強い信念とたゆみない努力があってこそでした。努力する。これこそが彼女の人生哲学なのです。

Per onality

## 従来の路線に逆行しても信念を貫く

「運ではなくて、実力よ（I wasn't lucky, I deserved it）」

これは、マーガレット・ヒルダ・サッチャーが九歳のときの言葉です。その日、故郷グランサムで詩の朗読大会が行われ、彼女は見事に優勝。大会会長から賞状が贈られ、「おめでとう。運がよかったね」と、声をかけられたときの小憎らしい返事です。朗読大会のために彼女は何度も練習をし、そして舞台の上で上手に読み、優勝しました。勝者の誇りに浸っているときに「運がよかったね」と言われても、それは違う。福引きに当たったのではなく、一生懸命努力したことが報われた、と彼女は主張したのです。

このエピソードは、彼女の個性を表すものとしてサッチャー名言集には必ず収められているものです。

一九七九年に始まったサッチャー政権は、十一年半続きました。これは英国の政治史上、二十世紀では最長、驚異的な長期政権です。英国では、首相は強大な力を持ち、自分の信念を貫いていきます。それまで英国では、労働党はもとより保守党も福祉国家の理念を維持する政策を採ってきましたが、彼女は福祉よりも自助努力を求めたのです。

つまり、生まれながらの障害を持った人や、病気で働けない人は助けますが、健康なのに仕事をせず国の援助を当てにする人たちには、自ら働くことを説いたのです。これは従来の路線に逆行するものでした。彼女があえて福祉の甘えを排除する政策を採った背景には、もちろん、財政上の理由があったのですが、そこに彼女の強い個性がうかがえると言えます。自ら努力して、目的を達し、その評価を喜ぶ……それは彼女の人生哲学なのです。

首相辞任決定後、ダウニング街10番地の首相官邸を去るサッチャー夫妻

## 少女時代から強い意志の持ち主

英国中東部グランサムのグラマー・スクール（高校）に通っていたマーガレット・サッチャーは、オックスフォード大学受験を希望しました。高校時代は一応良くできるほうの生徒であり、話し方も上手で討論も優れてはいたものの、勉強そのものはずば抜けて優秀というわけではありませんでした。

彼女がオックスフォード大学に進みたいと申し出たとき、校長先生は反対しました。その理由は、オックスフォード大学受験には彼女が学んでいないラテン語の試験があり、学校が受験料を負担するという制度を適用できなかったからです。そして、もっとやさしい大学に行くように勧められました。

しかし、マーガレット・サッチャーは一度決めたら、一歩も後へ引きません。受験料とラテン語の個人レッスン料は父が払ってくれるので、どうしてもオックスフォード大学に進学したいと再度申し出たのです。

マーガレットは、子供の頃からひたむきに思いつめるところがありました。結局、折れたのは校長先生のほうで、先生が自ら彼女にラテン語を教えることになったのです。彼女は大好きなピアノも止めてラテン語の勉強をゼロから始め、普通四年はかかるところを何と一年間でマスターしていました。こうして念願のオックスフォード大学受験のパスポートを手にしたのです。努力は報われたのでした。壁にぶつかると一層飛躍し、そして一段上に上がるというチャレンジ精神が、彼女の生き方なのです。

## 役者顔負けの演説のうまさ

サッチャーさんの演説のうまさには定評があります。原稿づくりの準備から、書き上げるまでの全過程に、彼女は目を通します。細心の注意を払うのは、自分の意志、政治哲学が表現されているかどうかです。最終原稿は、スタッフが帰宅した後も、必ず自分が満足するまで検討するといいます。

こうして練り上げ、仕上げられた原稿は議会で披露されるわけですが、間のとりかた、説得力、発声法、聴衆を把握する力、電光石火の機転、数字の駆使、威風堂々たる態度、優美な手の表情……など、彼女の自己表現力の完璧さは役者顔負けで、舞台芸術の域に通じるとさえいわれています。そうしたスピーチの達人がいなくなったこれからの下院本会議場は、白熱した議論は闘わされるにしても、スター不在の、いささか地味な舞台になってしまうのではないでしょうか。

オックスフォード大学進学のため、大好きなピアノをやめた



執務後、密かに明日の準備……〝完璧な自己表現力〟を努力が支える

彼女の自己表現の巧みさの背後には、持って生れた天性の他に、隠れた努力があることはいうまでもありません。彼女は人に教えを請うときは、驚くほど素直であるといいます。スピーチのアドバイザーにはゴードン・リース卿が当たりました。いわく「帽子や宝石は止めなさい。調子の高い朗々とした声はダメ」と、細かな点をひとつひとつ注意しました。

特に保守党の政党放送のときには、文字通り一言一句、発声法を教えたのです。発声法の特訓を二十分も受けると、彼女は完全に自分のものにしてしまいました。ゴードン卿はさらに、「マイクにできるだけ近づいて話したほうが、親しげに、セクシーに聞こえるよ」など、いろいろと秘伝を授けました。

## ある域を越えたら〝女性だから〟は通用しない

一九七九年、サッチャー首相の登場は極めて新鮮でした。女性宰相とあって、いつもとは違うざわめきも感じられましたが、彼女は〝女性宰相〟という言葉を好みません。「マーガレット・サッチャーは英国の首相である。性別は女性」――ただそれだけのことなのです。明晰な頭脳と強固な意志、そして、健康だけでなく、容姿までも恵まれていました。そのためでしょうか、「女性の利点を最大限に発揮する」とささやかれたことがありました。

確かに、〝鉄の男〟では単なるニックネームにすぎませんが、この〝鉄の女〟はそれ以上に世界にその名を知らしめたのは事実です。

しかし、女性だから得をするのは、駆け出しの頃だけのこと。いくら天下の美女であっても、その人が職業人としてある域を越えた後は、男性は対等に勝負をかけてきます。

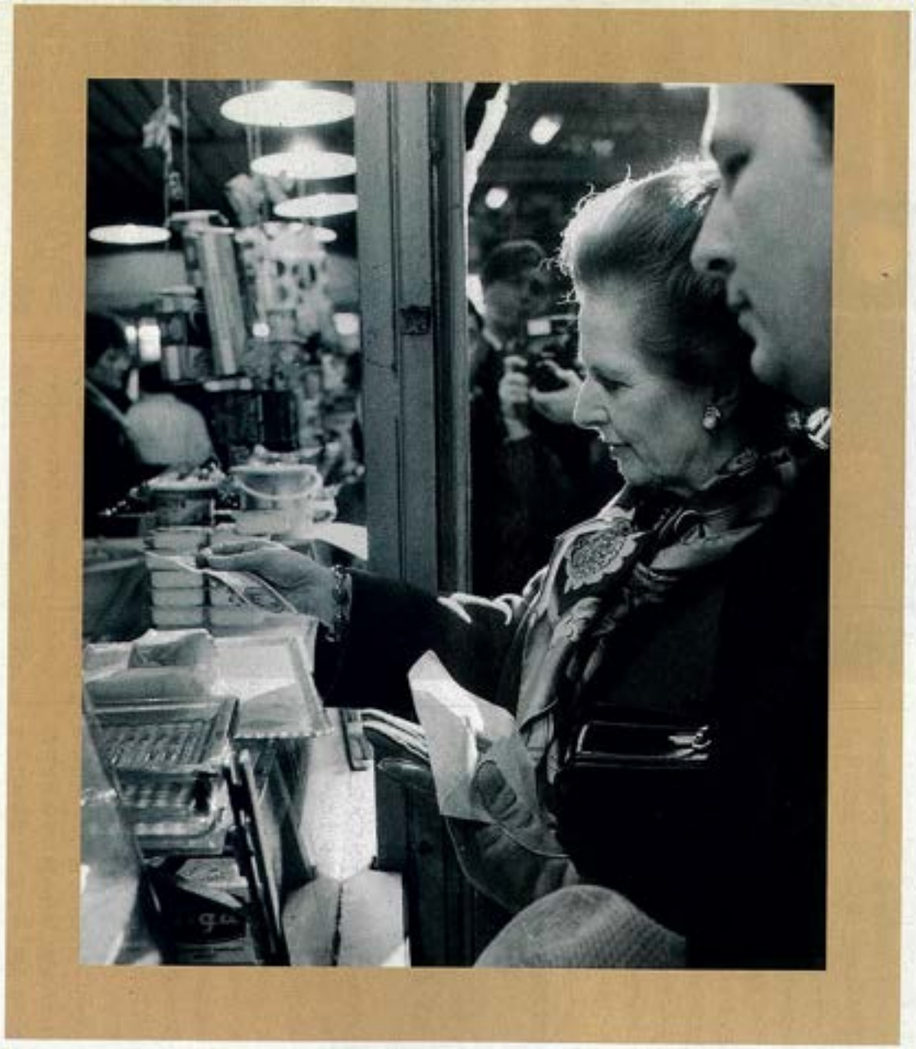
女性であることは利点だが、それだけでは。鏡に向かう彼女は何を考える？

サッチャー政権が十一年以上も続いた背景には、順風が吹いたことも見逃せません。天の恵み、北海油田の石油輸出が軌道に乗ったことによる経済の立ち直り。保守党と労働党の間で、政権が行き来していた英国で、この十年間は労働党がサッチャリズムに対し代案を出せなかったこと。そして、湾岸戦争に勝利したブッシュ大統領の人気上昇と同様に、フォークランド戦争での勝利も彼女に味方したのです。

現実の社会には、自分の実力を越えた時の運があると同時に悲運もあります。湾岸戦争の最中、保守党党首選挙をめぐって突然の辞任に追い込まれたという巡り合わせ。努力で好運をつかんできた素顔のサッチャーさんは、その巡り合わせに何を思うでしょうか。

# 素顔は〝家庭の大切さ〟を語る政治家

強い意志と統率力で英国をリードしてきた政治家としてのサッチャー女史も、一歩職務を離れれば良き妻であり、母なのです。



## 仕事を終えたら一目散に我が家へ

マーガレット・サッチャーが生まれ育った地、英国中東部のグランサムの町からロンドンまでは、国道1号線で南へ約百八十キロの一本道。堅実な食料品店経営者の娘だった彼女自身も、まさに一本道を歩んできました。わき目も振らず、道草も食わず、跳躍を重ね、勝負を挑んだ、超大型の人生は快調そのものでした。

一九八〇年代とその前後を通して、英国に号令をかけ、世界に向けて発言してきました。そのサッチャーさんはもはや、国際政治の表舞台から降りましたが、世界史の大きなうねりの中で今もなお大きな影響力を持ち続けています。

では、個人としてのサッチャーさんは、どういう生き方をしてきたのでしょうか。

彼女ほど、家庭の大切さを声高に語る政治家はいないでしょう。

執務や議会が終わるやいなや、一目散に我が家へ向かいました。帰宅途中に保守党議員の仲間たちと、クラブやパブに立寄ることはなかったといいます。

彼女は夫、デニス氏の全面的な支えを常に感謝し、双子の子供、マークとキャロルを小さい時から鍵っ子にしていたことに、負い目を感じていたのです。

教育大臣のころ、会議を中座して「デニスの好きなベーコンは、私でなければわからないから」と、近くのスーパーに走ったのは有名な逸話です。実働十八時間、国政の責任を負う首相のときでさえ、夫の朝食は自分で料理していました。

家庭での日常生活をそのまま続ける一方で、英国首相の重責を担っていたのです。つまり、ダウニング街十番地で働く〝お母さん首相〟であったのです。

子息マーク夫妻にできた最初のお孫さんを抱いて、嬉しそう

## 心温かな人柄を現す涙もろさ

また、サッチャーさんはとにかく若く、美しい。輝いているのです。ストレスとは無縁なのでしょうか。

「ストレス解消には、生体がもともと備えている体のシステムを効果的に働くようにしむけるのです」

と彼女はいいます。

「第一には、毎日バランスのとれた食事をすることです。第二は筋肉をたたくくらいの強力なマッサージ。これは血液循環を良くするための方法です」

要するに、食事とマッサージです。

自助努力を求めるタカ派の首相であったため、彼女には冷たい女という印象がつきまとってきました。でも、それは政治家としての姿です。サッチャー個人を直接知る人は誰もが、彼女の人間的な温かさと親切さを認めています。下院での討議が長引いた雨の深夜など、議会の玄関口でタクシー待ちをしている顔見知りの人を見つけると、彼女は自分の公用車であるローバーに同乗させてしまうし、自分の周りで働いてくれるスタッフのお祝いパーティには、きちんと出席したといいます。

また、彼女は実はたいへん涙もろい女性でもあるのです。一九八二年に息子のマークがパリ・ダカール・ラリーに参加して、サハラ砂漠で一時行方不明になったとき、人前で涙を見せたのは母親として当然かも知れませんが、それが見知らぬ他人であっても、身が危険にさらされた話を聞くと、涙が溢れ出るのです。

このあたりを題材にしたフレデリック・フォーサイスの小説『ネゴシエーター』の中でも、実名で登場するサッチャー英首相が米大統領子息の誘拐事件の報を聞いて声を出して泣く、という情景が描かれているほどです。

サッチャーについてよくいわれる冷たさとは、実は彼女が感情を表に出すことなく、自己抑制がきいているからなのかもしれません。冷たい人と自己抑制ができる人とは違うはずです。

「冷たい人に政治ができますか。政治とは人々の暮らしを良くしようというのが仕事なのですから」と、彼女自身は言います。

あまり知られていない彼女の温かな人柄……それはサッチャー政治の原点ではないでしょうか。

公用車ローバーの前で、仲のいいサッチャー夫妻

# Fashion

## 保守党の色・鮮やかなブルーがお気に入り

女性首相ともなると、その政治手腕とは別に服装なども注目の的になります。サッチャーさんはスーツを好んで愛用し、色は保守党のイメージ・カラーである鮮やかなブルーが好み。その凛とした姿は、今でも記憶にはっきりと残っています。

オフィシャルなときは保守党の色ブルーのスーツ姿が多い

### 辞任の決意の表明 ブルーのスーツ

英国史上初の女性宰相を十一年半にわたって務めた、マーガレット・サッチャーの毅然とした華やかさの秘密は何でしょうか。

元来、英国の女性は服装にあまり気を遣わないと言われています。特に中年以降の婦人となると、外観よりも実用本位の人が多いのです。決しておしゃれとは言えません。

それが、サッチャーさんは違っていたのです。いつもきちんと凛としていました。それだけではありません。セックス・アピールを感じるという男性の評判もあるほどです。

「今日はブルーを着ましょう」

一九九〇年十一月二十二日、保守党党首選への出馬を断念した彼女はこういい、ブルーのスーツを着て、ロンドンのダウニング街十番地（首相官邸）から、ウエストミンスターの下院本会議場に向かったのです。党の団結と総選挙での勝利を得るために、辞任を決意した日のことでした。ブルーは保守党の色であり、そしてサッチャーさんの好きな色だったのです。

突然首相の座を降りるに至った断腸の思いを、彼女は保守党の色ブルーで身を包むことで耐えたのでしょうか、それとも保守党への想いを精いっぱい表現したのでしょうか。議場での彼女はいつにも増して優雅だったように思えます。

サッチャーさんは、一九八八年のベスト・ドレッサーに選ばれています。彼女のファッションについては、まず、本人の言葉を紹介しましょう。

「着るものには関心がありまして、〝自分流のスタイル〟を楽しみます。これは長年仕事をしてきて、いろいろな儀式や行事をこなしているうちに、自然に編み出されてきたものです。スーツは、上着とスカートの別々の組合わせも楽しめて実用的ですね。それにウエストが少し太くなってもスーツはうまく隠してくれますから（笑）、スーツをもっぱら愛用しています」

サッチャーさんは自分の服は自分で選びます。好みが合うので、ロンドン・リージェント通りにあるアクアスキュータム社の製品がお気に入りとか。サッチャー・スタイルの基本は、まず、シンプルなデザインのスーツの型をいくつか決めておき、そして様々な種類の布地を用いて、少しずつアレンジを加えていきます。例えば、絹で仕立てたり、ブレード（組ひも）で縁取りをしたり、また反対色でコントラストを強調したり、と。

「ステート・バンケット」に出席のため正装の夫妻

マダム・タッソーの蠟人形館で。「私のほうが若いわ！」（右が本人）

### 鎧かぶとに身を包む？

彼女のファッションには特徴があります。基本の型があること。布地の違いでTPOに合わせた変化をつけること――そういえば、これに似たセオリーの服装があります。男性の背広です。彼女の肩パッドの入ったスキのないスーツ姿を見ていると、働く女性の背広に見えてきます。いえ、それは背広以上かもしれません。

男性の首相が外国を訪れても、どんな服装をしていたか逐一報道されることはありません。ところが、女性の場合は、一日に何回着替えたとか、誰と会った時はどんな服装をしていたかなど、克明に報告されるのです。テレビ・カメラも追いかけます。服装に関しては、女性のほうが厳しさを要求されているのです。

それも一国の首相ともなればなおさらです。髪のほつれ、服のしわなど、みだしなみにはいささかの乱れも許されないのです。サッチャーさんの端正なスーツ姿は、単なる背広以上に、職場での気品と優位さを保つための〝鎧かぶと〟の意味を持つのかもしれません。

彼女の一期目のファッションには、凝った蝶結びのブラウスが多く見られましたが、期を重ねるにしたがって、プレインになり、最近は襟なしのブラウスを着ています。その襟元には真珠のネックレスが清楚な輝きを添えています。靴は高めのハイヒール。これは、彼女の数少ない実用的ではないおしゃれのようです。

最愛のご主人の好みは「一度着たら覚えられてしまいそう」な鮮やかな色のドレスとか。くつろぐときもジーンズははきません。キュロット・スカートを愛用しているのです。

今後はキュロット・スカートの日が増えるのでしょうか。それともまだまだ、鎧かぶとを脱げないのでしょうか。

服装による自己演出も政治家サッチャーには欠かせない

# 〝鉄の女〟の原点？唯一の趣味は政治!?

英国では毎日のように行わなければ趣味とは言いません。
その意味では彼女の生活に
趣味と呼べるものはないことになりますが、
幼年時代から父親の影響で選挙運動に熱中してきました。
つまり、政治こそが彼女にとっては
人生最大の趣味と言えるのかも知れません。

1951年下院議員選挙に挑戦。遊説先でのポートレート

## 選挙は何よりも心がときめく

若い頃から政治の第一線にあり、同時に良き妻、良き母でありたいと一刻を惜しんで家庭生活を大切にしてきたサッチャーさんにとっては、ゆったりと過ごす時間はほとんどなかったのではないでしょうか。ですから、英国人が重視する趣味に関しては、人より深いとは言えないかもしれません。

子供の頃の彼女は、両親が敬けんなクリスチャンであったことから、学校を除けば教会が生活の中心でした。教会では日曜学校で幼い子供たちの面倒をみたり、聖歌隊にも加わって賛美歌を歌っていたのです。ピアノも習っていましたが、オックスフォード大学受験のために、レッスンはやめてしまいました。

そんな彼女が、小さな胸をときめかせたことがひとつだけあります。それはなんと選挙だったのです。後にグランサム市の市長（正しくは市議会多数派のリーダーとして市を代表する職）になった父親、アルフレッド・ロバーツの周りには、常に大人たちが集まっては熱っぽく政治を語り、選挙に熱中していました。

一九三五年の総選挙のとき、彼女はまだ十歳でしたが、生まれて初めて選挙なるものに接し、それを手伝ったのです。すでに投票を済ませた人のリストを、投票所の脇から党の選挙事務所まで運び、そのリストを基に、まだ投票を済ませていない人たちに投票に行くよう勧めるのです。父や地方議会の人たちが選挙の話をしてくれると、熱心にノートをとるような少女だったそうです。

続いて行われた地方選挙では、母、ベアトリスが保守党の選挙事務所を手伝っていたので、今度は使い走りです。保守党、労働党、自由党の政治講演会に、都合で父親が出席できないときには彼女が代わりに出席し、後で父に報告をするのです。封書の宛名書き、切手貼り、ビラ配り、投票への呼びかけ……マーガレットにとっては、すべてが新鮮であり驚きでした。

この興奮に魅せられ、彼女は次第に大人たちが熱中する政治の世界に引き込まれていったのです。早熟な少女にとって、選挙は何よりも心がときめきました。自分を打ち込める楽しみごとを趣味と呼ぶならば、サッチャーさんにとって、まさに政治が幼ないころからの趣味だったと言えるでしょう。

## 愛読書を美しく装するのが夢

それでは首相の座から退いたこの後、彼女は余暇をどう過ごそうとしているのでしょうか。英国の熟年情報誌『プレ・リタイアメント・チョイス』誌に彼女は、老後の趣味についてこう書いています。

「今はロイヤル・クラウン・ダービーやロイヤル・ウスターの陶器を集めていますが、そのうち、政界を引退したら、本の装丁を勉強したいですね」

大好きな英国の詩人キプリングの全集をはじめ、長年愛読してきた蔵書のほころびのひとつひとつを修繕し、美しく飾りたいと考えているのでしょう。

しかし、まだまだ政界に大きな影響力を持っている彼女にとって、ダービーのティー・カップに紅茶を注ぎ、自ら装丁しなおしたキプリングの詩集を読みふけるという、英国人らしい日々を楽しむのは当分先のことのようです。

そろってゴルフを楽しむ夫妻。このときばかりは彼女がサポート役だ





# サッチャー女史の人生を決めた家庭環境

一九八〇年代を通じて英国の首相を務めた
マーガレット・サッチャー女史は、どんな家に生まれ育ち、子供時代にはどんな影響を受け、
どんな人生哲学を持ち、なぜ政治家を志したのでしょうか。
そして、首相を辞任した今、何を考えているのでしょうか。

両親（中央）、姉（左）と一緒に。彼女が学生時代の珍しい写真

## 礎になった偉大な父

マーガレット・サッチャー女史が生まれたのは、一九二五年十月一三日です。彼女の人となりは、父親の存在を抜きにしては語れません。

サッチャーさんの姉、ムリエル・カレン夫人は「父にとって妹マーガレットは、娘であると同時に、弟子、子分、分身で自分がかなえられなかった夢を妹に託し、大きく花開いてほしいと願っていました」と、語っています。

彼女の父、アルフレッド・ロバーツ氏は十二歳で学業を終えています。視力が弱かったので、靴づくりの父の職業を継がずに、食料品店に勤めました。十代の終わり頃、中世からの古い町であるリンカン州のグランサムに移ってきました。一方、彼女の母、ベアトリス・ステファンソンはグランサムの鉄道員の娘で、服の仕立てをしていました。サッチャーさんのきちんとしたファッションは、母親ゆずりなのかも知れません。

職人の家庭で育ったロバーツ氏は、高等教育こそ受けませんでしたが、自己研鑽を怠らない大変な読書家でした。父の読む本を図書館から借りてくるのは、マーガレットの役目。週末に彼女が歴史書や伝記物を抱えている姿は、小さな町では有名でした。母はもの静かな人で、二人とも神への信仰が厚く、清潔と質素を重んじていました。

父のロバーツ氏はメソジスト教会の長老、学校の理事、市議会議員、そして後にグランサムの市長ともいえる市議会多数派のリーダーとなりました。自分の店の仕事以外に、公職に就き社会に貢献することを自分の使命と考えていたのでした。

彼女が育った家庭は、ビクトリア朝時代の美徳（質素、正直、自助、弱者へのいたわり）に満ち満ちていました。つまり、社会主義や共産主義、中央集権というものは政治的に危険である一方、自由社会は優れたメカニズムであり、社会の自主性にまかせて国家経済はつつましく運営したほうがいい。社会の中で搾取は許されず、独占的事業であれ、強大な労働組合であれ、搾取行為はあってはならないという、サッチャリズムの萌芽がすでに家庭の中にあったのです。

さてマーガレットがティーン・エイジャーとなった一九三〇年代は、国際情勢が緊迫していた時期でした。ファシズムが台頭してくる中で、平和か戦争か。それは民主主義の脅威でした。

当時、姉のペンフレンドだったユダヤ人の少女がウィーンからロバーツ家に身を寄せていました。彼女からナチ政権のユダヤ人迫害の話を印象深く聞き、マーガレットは抑圧の恐怖とユダヤ人への同情が結びつき、民主主義を守るために闘おうという気概を強く抱くようになりました。

そのころ保守党のチャーチルは、戦争が近づいていることを警告し、軍備の必要性を訴えていました。一方、労働党は英国の再軍備計画に反対。ヒトラーのチェコスロバキア侵攻後でさえも、徴兵に反対したのです。彼女が保守党に傾いたのは、このときでした。

## 独立独歩の少女時代

学生時代のマーガレットは、どうだったでしょうか。学校では親友はいなかったようです。誰とでもつきあう社交家でもありませんでした。彼女にとっては、学校より家庭が生活の中心だ

60歳を越えたいまも、彼女は若々しさとエレガンスさを失っていない

ん候補者にとって、自宅から近いロンドン近くの選挙区選びには難航しました。少なくとも二か所の選挙区で断られ、ようやく大ロンドン市北部で保守党の優勢区であるフィンチレー選挙区で指名を受けられました。サッチャー女史が下院議員に初当選したのは、一九五九年、三十四歳のときでした。

こうして下院議員になったサッチャー女史は、年金担当の政務次官、教育大臣とみるみる頭角を表し、一九七五年二月十一日、保守党の党首選で現職のヒース氏を破ってみごとに当選。そして一九七九年の総選挙に勝ち、宰相になったのです。

十一年後の一九九〇年十一月、サッチャー女史は首相を辞任しました。

今年に入ってから、彼女は今の議員任期を終えた後は選挙に立たないことを表明しました。今後は、この七月に発足した「サッチャー基金」のために活動するそうです。同基金は、自由主義と個人主義を核とした彼女の政策を、世界に広めようというものです。

政治の表舞台からは降りても、サッチャー女史が培ってきた強い意志、そして自由と民主主義の精神は今もなお健在です。

# Family

↑少女時代。小学校のクラスの仲間と一緒に。中央がサッチャー
←1951年12月、マーガレット・ロバーツはデニス・サッチャーと結婚
↓（右）大学では化学を専攻した彼女。そのころから政治家への夢を育んでいた
↓（左）1959年、下院に初当選したときのサッチャー。国会議事堂前にて

ったのです。学校では同級生に敬遠され、好かれることなく、ねたまれていたようです。野心家、気取り屋、自信家と思われ、彼女が先生に難問を浴びせたりすると、上級生から恨みを買っていました。

でもそれは、彼女が父からしつけられ、彼女の一生の価値観になった言葉が背景にあるからなのです。

「人の後ろについていってはいけない。人と違うことを恐れるな。自分のやるべきことを自分で決め、必要だと思ったら、他の人の先に立って行きなさい。人の後追いだけはしないように」

彼女は十七歳のとき、オックスフォード大学のサマービル・カレッジに入学し、化学を専攻しました。しかし彼女はこの入学前から、次は政治活動をするのに有利な法律の勉強をしたいと心に決めていました。というのも彼女が十六歳のとき、グランサム市長になった父の関係で裁判所のノーマン・ウイニング判事と知り合い、「私自身も、ケンブリッジ大学で物理の学位を取った後に法曹界入りした」という話を聞いていたからです。

法曹界に強い関心を抱きながらも、化学専攻の進学を決めていた彼女にとって、自分にも同じことができないはずはないと心に決めたのです。このウイニング氏との出会いが、自分の人生を決定したと、サッチャーさんは後に述懐しています。

一九四三年十月のオックスフォード大学入学と同時に、彼女は、大学の学生保守連盟に入会します。一九四六年には、この連盟の会長として、マーガレットは初めて保守党大会に参加しました。大学を卒業すると、化学会社に研究員として就職しています。そして働きながら、地域の保守党支部で活動を始めたのです。

一九四八年にはオックスフォード大学同窓会の代表として、保守党の会議に出席し、そのときダートフォード（ロンドンの北約三十キロ）地区の保守党支部長の知遇を得ました。このことが翌年にダートフォード選挙区の候補者の指名を受けることにつながるのです。彼女が二十四歳のときでした。

## 結婚、そしてママさん議員へ

夫となるデニス・サッチャー氏と出会ったのもこのときです。彼女がダートフォード選挙区の候補に指名された直後に、友人の家でデニス氏を紹介されたのです。当時、彼は二十六歳。ロンドンで家業の塗料化学会社の重役をしていました。デニス氏も政治に関心があり、自分でも地方選挙に一度立候補したことがありました。彼は父ロバーツと同様、意志が強くて独立心に富んでおり、彼女とはすぐ意気投合しました。マーガレットは、デニス氏の中に父を見出したのかも知れません。

彼女は一九五〇年、一九五一年と選挙に立候補しましたが、当時のダートフォードは労働党が強く、二度とも落選してしまいました。その落選後の一九五一年十二月、二人はロンドンの教会で結婚し、チェルシーでアパート住まいを始めました。

その後の八年間は、彼女は選挙に立つことはなく、対外的には目立つ活動は行いませんでした。一九五三年に双子のマークとキャロルが誕生して、彼女は妻として母として多忙な日々を送りながらも、念願の法律の勉強を始め、一九五四年には弁護士試験にみごと合格しています。

そして再び立候補。しかし、ママさ

特別インタビュー

# 「私の知っているサッチャー」素顔のサッチャー

英日友好議員連盟会長
サー・ジュリアン・リズデール下院議員夫人

## レディ・パディ・リズデールさん

*Lady Paddy Ridsdale*

## 「なんて心遣いの細やかな方」

**——あなたの知っているサッチャーさんは、どんな方ですか?**

サッチャーさんは本当に素晴らしい方です。そばで見ていると、どんな問題が持ち込まれても、判断が下せる。英国のことだけではなく、世界の問題に対しても発言ができ、現実的な打開策が打ち出せる方ですね。

それでいて、きわめて女性的なご婦人。晩餐会を主催するときでも、細かな点にまでいちいち心配りをなさって采配を振るうのですが、いまのままで普通の主婦のようにお料理の心配をしていたかと思うと、次の瞬間には政治家としてスピーチをなさる。その切り替えの早さはまったく驚かされるばかりです。

そして、実に思いやりのある方。これは悲しい出来事ですが、IRA(北アイルランドの反体制組織)が暗殺事件を起こしたときには、彼女は一報を聞くやいなやロンドンを発って、犠牲者の未亡人に会いに行き、哀悼(あいとう)の意を表しました。この心配りはなかなか真似ができませんよ。

**——サッチャーさんは英国病を退治したといわれますが、その点はどうなのですか?**

まさに英国病の治療に努力した方です。この国は労働組合の力が強く、難しい問題が発生しています。例えば一つの工場に四つも五つも組合があったりするのです。命令系統も複雑になるし、生産性も上がりません。ちょうど日本からの投資を期待していたときなのに、これでは日本企業もしり込みしてしまいかねない。そこで対話と力の政策で組合の力を押さえこみました。

"親方日の丸"の国営企業も民営化して活性化させました。本当にこの国をよみがえらせるために力を注いだ人です。英国に「サッチャリズム」を導入し、政治や経済全体を活性化させた業績は高く評価されるべきでしょう。

**——ところでサッチャーさんの女性らしさとは、どんなところですか?**

彼女はいつもきちんとした服装をしていて、着こなしが上手ですね。特に最近は素晴らしい。彼女はなにしろ首相でしたから。女性首相はこの国では初めてですので、どうしても注目を集めます。上手にいって当たり前。なにかあると「やっぱり女は……」なんて言われますからね。そうした点を意識してか、彼女の服装はエレガントでチャーミングです。サッチャーさんは首相在任中に世界各国から宝石を贈られたのですが、その宝石類は、メージャー首相夫人のためにと官邸に残していったそうです。

それとまあ、とにかく若々しい方ですね。睡眠時間が短くても平気なタフさを持っている。四時間しかおやすみにならないということですが、それでも世界のためにもっともっと働こうとしている。まさしくエネルギーのかたまりのような人なんですね。

あのエネルギーは、天性、生まれつきのものなのでしょう。それと目標に向かっていく熱意。休暇でお出掛けになっても、一週間もすると退屈して、仕事に戻られるそうです。

**——スタッフの評判はどうですか?**

首相官邸には、世界の首脳をもてなすためのスタッフがいるのですが、サッチャーさんは官邸にある家族スペースで簡単なお料理を作って皆に振る舞われる。日本ではどうか知りませんが、英国では政治家の奥さんはみんなそうなのです。ただ、彼女は首相ですから……。そういった心配りができる人間が人に愛されないわけがありませんでしょう? 本当によくできた方ですよ。

国会議事堂(ビッグベン)は英国だけでなく、近代民主主義の象徴だ

日本訪問時のリズデール下院議員夫妻

フォルテ・ホテル・グループ・ジャパン副社長

# ジェーン・マーウィックさん
*Mrs. Jane Marwick*

## 「英国人の誇りを取り戻してくれた人」

**——サッチャーさんはあなたにとってどんな存在ですか?**

私にとって大きいのは、サッチャー政権11年の間に、私自身、英国人であることを誇りに思えるようになったことですね。

以前は英国人であることで恥ずかしい思いをしたこともあります。なぜかって、英国のイメージといえば悪いことばかりだったから。例えば、英国人はストライキばかりしているとか、なまけ者で働かないとか、英国製品は故障ばかりしているとか言われたからです。しかし彼女のおかげで、そういうイメージはずいぶん改善されてきたと思います。

**——英国病退治には、かなりの荒療治が行われたとか?**

確かに彼女は、英国病を治すために強い薬を使いました。我々は苦い薬を飲まされたのです。でもその薬は確実に効きました。私はそう思っています。

サッチャーさんが首相になってからは、人々の意識が変わりました。それまでのようにのんびり椅子に座って与えられるのを待つのではなく、外に出てチャンスをつかもう、チャンスを得たいのなら挑戦しなくては……という気持になったのですから。確かにサッチャーさんは良い医者ですよ。

彼女は、最初は労働組合に対して強力な姿勢で立ち向かい、賃金カットを行ったりしたので、かなり嫌われました。でも日本の諺にあるように、「良薬は口に苦し」だったのです。

**——彼女が首相になって、活気がよみがえったということでしょうか?**

サッチャー政権になってから、所得税は25%減税されました。私の友人なども、会う度にみんな確実に豊かになっています。豪華な家に住み、素敵な車に乗り、海外旅行を楽しんでいます。全般的にいって、サッチャー政権でよかったと感じつつあるでしょうね。彼女のとった政策の効果が徐々に出てきて、楽しく暮らせるのですから。

**——お年寄りはどう思っているのですか?**

例えば70歳になる私の両親の場合、彼女を最初は過激な人物だと思っていたようです。彼女は〝鉄の女〟と呼ばれるくらい強い性格だし、私の両親の世代では首相は男の仕事だと思っていたでしょうから。

しかし、いまは評価しています。私の両親は健康を害しているのですが、保守党政権の下で心のこもった看護を受けています。以前とは大違いです。ですから、評価どころか、感謝さえしているのではないでしょうか。他の人たちも同じ。最初は戸惑いを感じていても、彼女の政策が次第に浸透し、恩恵を受けるようになると、有難いと思うようになるのでしょうね。

**——初めは人気がなかったのですか?**

彼女が首相に就任したころは、我々は女性宰相の登場を誇りに思っていました。しかし、彼女は強固な意志を持っていて、あらゆることに戦いを挑んだので、その点は大人の人たちにとってはいただけなかったようです。彼女の人気はフォークランド戦争で上り、人頭税問題で下がりました。でも、首相を辞任するに至った経緯については、サッチャー好きでない人までも同情しています。彼女は敵も味方も多い人でしたが、その業績を考えると、彼女を追い詰めた保守党幹部のやり方に反感を持つようですね。

**——今後のサッチャーさんについては、どう思いますか?**

彼女は不屈の闘志を持っていて、今後も講演などで活躍されるそうです。日本にも来ますね。私は、彼女が明確な意思を持つ点、自分の意見に固執すること、正しいと思ったことに取り組む姿勢を尊敬しています。人気は衰えることはないでしょう。

彼女はイギリスを守るために闘ってきたのです。自分のやるべきことを自覚し、成し遂げる決意と確信を持っていたのでしょう。普通の人は、自分がやらなければならないことが分かっていても、状況に応じて簡単に考えを変えがちですが、彼女は確信したらまっしぐらに進むのです。

もちろん、他の人の意見に耳を傾けることは必要ですが、指導者たる者は、みんなのためになることだと思ったら、とにかく敢然と立ち向かう気構えが肝要です。そうした強さを敢然と示したサッチャーさんは、まさに、歴史に残る名宰相と言えるのではないでしょうか。

サッチャーさんの苦い薬は本当に効きました」と語るマーウィックさん

撮影/佐藤 龍

# サッチャーと英国政治

平民出身で、閣僚としては教育大臣の経験しかない一女性議員でも、党首選に勝ち、自ら党を勝利に導けば、首相になれる英国。近代民主主義の発祥地・英国の政治風土はどのようにしてでき、政治はどのように機能しているのか。サッチャーを首相に選んだ英国という国を知るために、そしてその英国をモデルに選んだ日本の政治を知るために、英国の政治の仕組みを簡単に理解するための基礎講座。

## 英国の議会制度

英国議会の歴史は、中世のアングロ・サクソンの賢人会議にまでさかのぼり、現在も形式的には女王と上院、下院の三者で構成されることになっています（三者が一堂に会するのは、年1回の開会式のときだけです）。

優越性のある下院は、六百五十人の議員（うち女性議員は四十三人）、上院は、貴族や英国国教会の聖職者、一代貴族など一千百八十九人（実際に登院するのは三百人くらい）から成ります。サッチャー女史も貴族に列せられると上院にまわることになります。

議会の機能は、法律をつくること、税金を決めること、それに討議することです。議会は、国民の同意をその代表を通じてとりつけるための道具、と考えられています。会期は秋にはじまり一年間（夏休み、クリスマス、復活祭などの休会があり、年間開会日は、百七十日くらいです）。

下院議員の歳費は、年間約六百十四万円、事務経費が五百七十三万円、その他旅費などがあります（一九九〇年現在。一ポンド二三〇円で換算）。

## 英国の選挙制度

英国の選挙制度の基本は、比例代表制がつかない単純な小選挙区制で、全国は六百五十の選挙区に分かれ、各一人の下院議員を選出します。選挙区の平均有権者数は七万人弱です（実は地方選挙も行政単位をさらに細分化したミニ・小選挙区で争われます）。

選挙区の区割りは、政府、議会から独立した選挙区画委員会で、人口の移動などを考慮して見直され、その結論が尊重されることになっています。選挙は、議会が解散されて実施される総選挙と、議員が死亡したり、資格を失ったりして、三、四か月後に行われる補欠選挙があります。

選挙権は十八歳以上、被選挙権は二十一歳以上、候補者は各政党の選挙区支部の選定委員会で決められますが、原則として現職優先、新人は地域とのつながりというより党本部のリストから面接などで選択されます。

法定選挙費用は、各選挙区の有権者数および都市部か郡部かで変わり、有権者六万人とすると、都市部で百二十七万円、郡部で百四十万円です（一ポンド二三〇円で換算）。

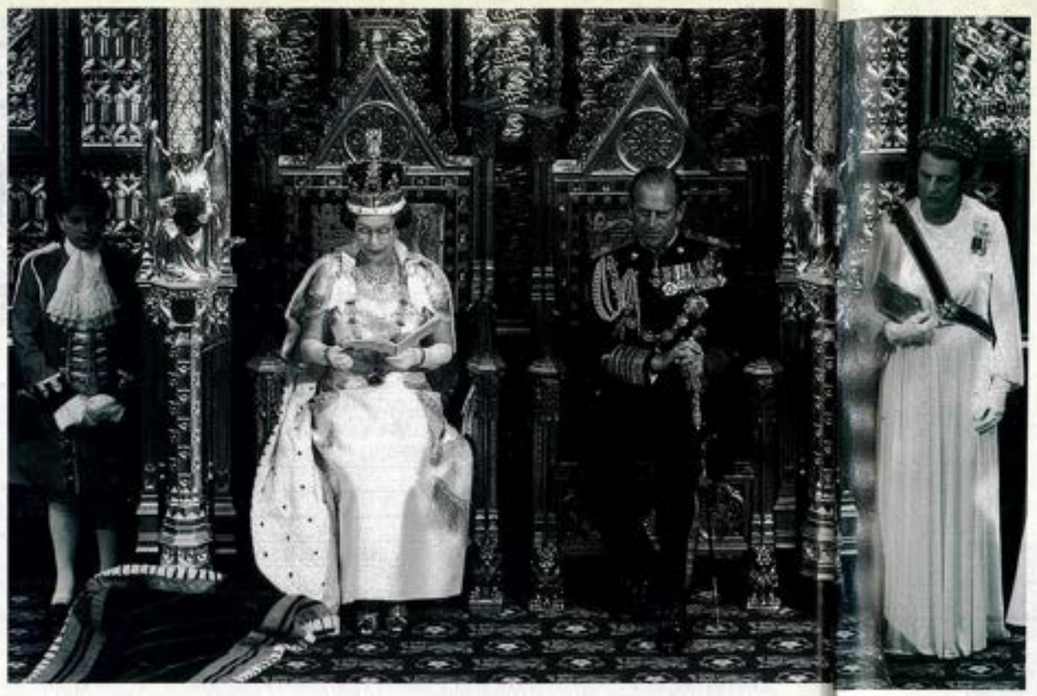
## 英国の政党

英国では、十八世紀から何らかの形で政党が存在し、政治制度の一部となってきました。

それが十九世紀半ばから二大政党となり、一方の雄がサッチャー女史の率いた保守党、そして現在相対しているのが労働党です。戦後十三回行われた総選挙では、保守党の七勝、労働党の六勝と拮抗していますが、サッチャー女史はこの七勝のうち実に三勝を上げたのです。

このほか有力政党として、かって保守党と争っていた自由党とサッチャー政権後に労働党から分かれた社会民主党が一緒になった社会自由民主党があり、一九八七年の総選挙では、二十二%余の得票率でしたが、小選挙区制のため二十二議席を確保するにとどまりました。

二大政党の組織の特徴は、院内組織が院外から拘束されないこと、全国大会は年中行事としてテレビで中継されること、選挙区の組織がしっかりしていることです。保守党の場合、党首は所属議員の公選で選ばれます。



1987年総選挙では保守党が三連勝した

退陣後の日曜日、礼拝を終えて教会から出る

ビッグベンは議事堂の下院側にある時計台

## サッチャー前首相の24時間

1987年11月24日(火)

サッチャー前首相〝実働17時間〟のある一日はこのように過ぎていった。この日は日中の外出はなかった。

- ● 6時起床▶ＢＢＣラジオ第４放送（ニュース専門波）ニュース、トゥデイを聞く
- 7時30分▶ご主人デニス・サッチャー氏の朝食を料理。サッチャー自身はオレンジジュース、ブラックコーヒーとビタミンＣ錠剤。タイムズに目を通す
- 8時30分▶側近の用意した全国紙、有力雑誌の要約を読む
- ● 9時▶ 階下の首相執務室で、閣僚、側近、スタッフと打ち合せ 10時30分ごろ出席者の一人がそこで急病。手当てを指示
- ● 1時▶ 下院での質疑資料を検討しながら軽い昼食
- ● 2時40分▶下院到着　院内執務室へ
- ● 3時▶ 議場最前列の政府首脳席へ（フロントベンチ）
- ● 3時15分▶議論白熱　バーミンガムの看護施設と看護婦手当に関して
- ● 3時30分▶保守党議員連との会議
- ● 6時▶ バッキンガム宮殿到着。エリザベス女王に週間政務報告90分。通常よりやや短かめ
- 8時15分▶帰邸、夕食。レセプション出席のため着替え
- ● 9時30分▶バッキンガム宮殿到着
- 10時30分▶気分が悪くなり、予定より30分早く帰邸。首相にしては、いつもより早い就寝

自宅のキッチンで彼女の珍しいスナップ

写真提供／『TODAY』紙（BY TIM ANDERSON, I.SHOWEL,STEVE BURTON）REX FEATURES インペリアル・プレス、カメラ・プレス、PPS、キーストン、ハルトン・ダッチ・コレクション、ロンドン・ピクチャー・サービス、シグマ通信社、柴田一良

# 10月号
# 特別企画第2弾！
# サッチャー女史訪日特集

今月号の特集「Mrs. サッチャー」のすべて、いかがでしたでしょうか。〝鉄の女〟と呼ばれ、強力な指導力で英国を導いた大政治家の知られざる側面が、よくお分かりいただけたと思います。

10月号掲載の「特別企画第2弾」では、彼女の訪日を機に、サッチャー政権の12年を振り返りたいと思います。彼女はどんな足跡をたどって、首相の座に上りつめたのか。そして何が原因で首相官邸を去らなければならなかったのか？ー英国の栄光を復活させ、英国病を克服した彼女の政治手腕を分析し、彼女の政治哲学を通して、政治家の〝あり方〟を考えてみたいと思います。

なお、巻頭インタビューで、来日したサッチャー女史のナマの声を聞きたいと思います。インタビュアーは大宅映子さんです、ご期待ください。

[CONTENTS]


▶ サッチャー女史単独インタビュー
聞き手：大宅映子さん
▶「ダウニング街10番地」のドラマ
彼女はどうやって首相の座に上りつめたのか？
なぜ彼女はその座をおりたのか？
▶ 信念とユーモアの政治家サッチャー
イギリス議会政治の実態と彼女の政治姿勢
▶ イギリスの政治改革
小選挙区制の利点とその実態を現地に見る
▶ サッチャーの政治哲学
彼女はどうやって英国病を退治したか？
克服の手法を総点検する！
▶ EC統合とイギリス
国家主権とEC、イギリスの置かれた立場
▶ 外交の天才・サッチャー
彼女の外交政策、ゴルバチョフを世界に送り出した外交手腕
etc…。

## マーガレット・サッチャーの軌跡

| 年 | 令 | 柄 |
|---|---|---|
| 1925 | 10月13日 | マーガレット・サッチャー誕生 |
| 27 | 2歳 | 父、アルフレッド・ロバーツ、市会議員に当選 |
| 34 | 9 | 学芸会で詩の朗読賞 |
| 35 | 10 | はじめて選挙戦を手伝う |
| 〃 | | ケスティーブン・アンド・グランサム・ガールズ・スクール（高校）入学 |
| 38 | 13 | ナチス・ドイツ、オーストリア侵攻 |
| 40 | 14 | チャーチル内閣成立 |
| 41 | 16 | 父ロバーツ、グランサム市長に選任 |
| 43 | | オックスフォード大学サマービル・カレッジ入学（化学専攻） |
| 〃 | | 大学の学生保守連盟に入会 |
| 47 | 22 | はじめて保守党大会に出席 |
| 〃 | | 大学卒業、化学学社に就職 |
| 49 | 23 | ダートフォード選挙区で保守党から候補者に指名される |
| 〃 | | デニス・サッチャーと知り合う |
| 50 | 25 | 総選挙に落選（労働党勝利　アトリー内閣） |
| 51 | 26 | 〃　（保守党勝利　チャーチル内閣） |
| 51 | | デニスと結婚、ポルトガル、スペインへ新婚旅行 |
| 53 | | 長男マーク、長女キャロル出生 |
| 54 | | |
| 58 | | フィンチレー選挙区から保守党候補者に指名される |
| 59 | | 総選挙で初当選（保守党勝利　マクミラン内閣） |
| 60 | | 母ベアトリス・ロバーツ死亡 |
| 61 | | 年金・国民保険省政務次官に就任 |
| 64 | | 総選挙当選2回（労働党勝利　ウィルソン内閣） |
| 66 | | 〃　当選3回（　〃　　〃　） |
| 66 | | 影の内閣のメンバーに |
| 68 | 43 | 影の内閣の教育相に |
| 70 | 44 | 父アルフレッド・ロバーツ死亡 |
| 70 | | 総選挙当選4回（保守党勝利　ヒース内閣、教育相となる） |
| 73 | | 中東戦争、石油ショック、保守党内閣炭鉱ストに屈する |
| 74 | | 総選挙当選5回（労働党勝利　ウィルソン内閣） |
| 74 | | 総選挙当選6回（労働党勝利　ウィルソン内閣） |
| 75 | | 保守党党首選に勝つ。初の女性党首 |
| 76 | 51 | 対ソ強硬演説（ソビエトから「鉄の女」と呼ばれる） |
| 77 | | 第一回訪日 |
| 79 | | 総選挙、保守党勝利　首相に任命される |
| 82 | | フォークランド戦争に勝利 |
| 82 | | 訪日。日産自動車に英国進出を要請 |
| 83 | 57 | 総選挙、保守党連勝 |
| 84 | 58 | 炭鉱ストに勝つ |
| 84 | | ブリティッシュ・テレコム民営化 |
| 87 | | 総選挙、保守党3連勝 |
| 89 | | 国際民主同盟第4回党首会議出席のため来日 |
| 90 | | 保守党党首選挙に敗れ、退陣声明 |
| 91 | | 次期総選挙に出馬しないと声明 |
| 91 | | サッチャー基金発足 |

参考図・資料：Kenneth Harris. 〝THATCHER〟／Russell Lewis. 〝MARGARET THATCHER〟／Patric Cosgrave. 〝THATCHER-The First Term〟／
森嶋通夫著『サッチャー時代のイギリス－その歴史、経済、教育』
THE TIMES／THE SUNDAY TIMES／THE GUARDIAN／OBSERVER MAGAZINE／FINANCIAL TIMES／DAILY TELEGRAPH／SUNDAY TELEGRAPH／DAILY MAIL／DAILY EXPRESS／THE INDEPENDENT／THE INDEPENDENT ON SUNDAY／EVENING STANDARD／THE LISTENER

## （英国首相の選ばれ方）

不文憲法